

「たたむ」ということ

長崎日本大学中学校 二年 古賀 絢華

テレビを見ている母の手がとまった。

目はウルウルと赤くなっている。ニュースは福島原発の放射能汚染の問題で、それまで住んでいたふる里の家を離れ、遠くに疎開しなければならなくなった家族の話だった。父親は仕事の都合で別居になり、子供は友達と離れたくないので嫌がっている。これからの生活も不安でたまらない。それでも母親は子供の将来のために決心したと苦しい胸のうちを語っていた。「私達はまだいい方だと感謝しています。近くには家族をなくし、たつたひとり残された人もいますから。」母は急いでティッシュを取って目に押しあてた。

私達は震災前と何も変わらない毎日を送っている。幸せなんだ。「そうだ。変わらないということがどんなに有難いことか、近頃ようやく分った気がするな。」父がつぶやいた。母はうなずきながら、とりこんだ洗濯物をまた、たたみ始めた。

母は毎日、大量の洗濯をする。家族は三人だが、父の母と母の祖母が入院していて、高齢のため認知症があり、着衣を汚すことも多いのだ。

夕食の後、テレビを見ながら洗濯物をたたむのが母の日課になっている。背すじをピンと伸ばし、ひざの上に洗濯物を広げ、シワを伸ばしながら、きちんと丁寧にたたんでいく。正方形、長方形に積みあがったものを、しまう場所ごとに仕分けし、病院に持っていくものは手提げに詰めて、まるで整理整頓のお手本のように美しい。私はというと、そのお手本がほとんど身につかない。「たたみ方で、その人の性格がわかるものよ。」と言われるのだが私の部屋はいつも雑然として、油断すると足の踏み場もなくなってしまふ。見るに见かねたのだろうか、時折学校から帰ると、部屋が寸分の隙もなく整理され、塵ひとつなく掃除されている。ごめんなさい、お母さん。父が出てきて口をはさむ。「お前の部屋は、ゴミ溜めみたいだからな。」そんなにひどくありませんよーだ、と思っても反論できない現実がある。

庭師のTさんが私の家に来るのは、いつも日曜日と決まっている。まるで散髪するように庭木がみるみるさっぱりと端正になっていく。私はその様子を飽かず眺めていると、脚立の上からいろいろなることを教えて下さる。「おじさん、この移植した木はつきますか。」「植えた時に小鳥が止まればつく、とよく年寄りには言ったものだ。木も生きものだから、あつ、鳥がきてくれた、というとやっぱり大丈夫だね。科学的には分らんが、私はそう思つとるよ。」私はTさんのこんな話が大好きだ。

Tさんは休憩の時、楠の木陰で黙って風に吹かれていることが多い。今はムクゲの花が次々に咲いている。直径五、六センチの五弁の花は未明に開き始め、夕方にはしぼんでしまふ短命な一日花で、純白のハンカチを絞ったような花びらは薄くてやわらかく、はかなげに見える。しかし、Tさんは「ムクゲは生命力の強い木で、丈夫で寒さに強く刈り込みがきくので、生け垣によく植えられているよ。」と意外な一面を聞かせてくれた。そして、私が胸のしびれるほど感動を受けたのはそれに続く話だった。

「ムクゲの花は枯れても花びらを散らさないんだ。わずか一日咲いて、夕方しぼんだ花びらは蕾の時と同じ形にきちんとたたまれる。筆の穂先のように行儀よくたたみ込んで、蕾の時の元の自分の姿に戻って、さあこれでよし、とでもいうようにポトンと落ちる。地

面に落ちた花は、ひそやかに朽ち、やがて土と同化してしまう。何気ないけど、決意のようなものを感じられて、けなげだねえ。おじさんの勝手な思い込みだけだね。」
「たたむということは、生きる時も人生を終える時も折目正しくあるために大切なことなのだ。私は改めて整理たんすや、水屋、冷蔵庫の中をのぞいてみた。天真爛漫^{らんまん}、いつもほがらかに笑っている母の、リンとした性格がそこにきっちり詰まっているのが見えた。